様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００１１８

研究課題名（和文）18世紀後半における「儒者」の総合的研究――頼春水とその周辺

研究課題名（英文）Confucian Scholars In The Late Tokugawa Period

研究代表者
清水　則夫（Shimizu, Norio）

明治大学・理工学部・専任准教授

研究者番号：３０５８０８４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：　18世紀後半の儒者について、頼春水（1746～1816）を例に多角的に検証した。その結果、下記のような結果を得られた。
　当該期の儒者とは、儒教理念の実践を指向することは勿論だが、他面で家族構成や武士の習俗等の現実に規定された。逆に、現実がむしろ理念の実践を助けることもあった。また彼らの人間関係は、思想的交流以外にも、地縁や血縁、社会的地位にもとづく繋がりも強く、そのため学派間の対立は、表面化することもあるものの、従前より目立たなくなっている。こうした人的繋がりを把握するうえで有益なデータベース（JBDB　https://app.jbdb.jp/#/）を構築しつつ活用した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果の学術的意義は、従来政治的に把握されがちであった18世紀後半の儒者を、彼らの具体的な生に即した形で再検討した点にある。寛政異学の禁は、確かに政治的に大きな事件であったが、その根底にあったのは本研究が明らかにしたように、具体的な個人としての儒者であったことを見逃しては、政治的分析も不十分なものに終わってしまうだろう。社会的意義としては、日本における外来思想受容の一例として、儒教思想受容の具体相を描いた点が挙げられる。中国との関係は現代の大問題だが、日本が中国文化を深く受け入れてきた歴史は否定できない。この点に改めて注意を促すことには、一定の意味が認められよう。

研究成果の概要（英文）：　We examined Confucian scholars in the second half of the 18th century from multiple perspectives, using Lai Shunsui (1746-1816) as an example. The results are as follows.
　Confucianists of the period were, of course, oriented toward the practice of Confucian ideals, but they were also defined by the reality of their family structure and the customs of the samurai. Conversely, the reality sometimes helped them to put their ideals into practice. In addition to ideological exchanges, their human relationships were strongly connected by geographical, blood, and social status, so that conflicts between schools of thought, although they sometimes surfaced, were less noticeable than before. We have used the database (JBDB https://app.jbdb.jp/#/), which is useful in understanding these human ties.

研究分野：思想史

キーワード：頼春水　朱子学　データベース　広島藩　藩校　服部栗斎　飯岡義斎

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

江戸時代、儒学思想が社会に普及したのは 18 世紀後半以後で、その意味で当該期は一つの画期と言える。しかし、この時期の儒者の社会的存在様態や、その思想史的意義に関する研究には、(1)政治面が誇張されている、(2)武士社会における位置づけが不十分である、(3)古い学派意識に拘泥している、という問題のために当時の儒学の実態を把握できていない。

２．研究の目的

上述の背景にもとづき、本研究の目的は下記のように決定された。

(1)当時の儒者の道徳思想および個人レベルでの儒学受容の思想史的再評価を通じ、当該期の社会における儒学思想の内実と、それが個人において持った意味の多様性に迫る。

(2)武家社会における藩儒の特異性と、藩校の教育思想および制度の実態解明を通じ、当該期の武家社会における儒者の位置づけと、藩校教育の実践的課題とそれに対する儒学思想的対応の具体相に迫る。

(3)学者間交流・学者間ネットワークの実態解明と、朱子学再評価に対する再検討を通じ、当該期の社会における儒学の広がりと、その中で学派の意味づけが従来とは異なるものへと再編成されていく過程に迫る。

３．研究の方法

上記の目的のために、頼春水とその周辺に着目する。頼春水は武家と平民の双方にまたがる存在で、かつ公的教育および私的儀礼を実践した。また彼の交友範囲は広いが、その朱子学者としての意識は、既存の朱子学派と重なりつつもずれていた。その上、彼は多年にわたる日記を残しており、ネットワーク研究にも有益である。この三点があるため、本研究にふさわしい研究対象と言える。

上記の目的に即して、方法は下記のごとく定めた。

(1)頼春水とその周辺の思想　頼春水の死生観と、彼にとっての儒学の意義とを明らかにする。また春水とその交友関係にあった人物との交流および思想に対し、既存の学派分類とは異なる角度から再検討する。

(2)儒者の社会実践としての藩校と儀礼　頼春水が藩儒を勤めた広島藩校「学問所」について、思想面および制度面の分析を行う。また、藩校での孔子祭における春水の関与を検討する。

(3)JBDB の充実　研究分担者の一人が運営する JBDB は既に公開されているが、これを一層充実させる。

４．研究成果

(1)研究の主な成果

本村昌文は頼春水の父の死に注目し、「孝」という理念と、藩儒かつ武士としての現実との間で、春水が実際にどのように行動したかを分析し、彼の行動は家族構成や武士の習俗等の現実に規定されたが、他面ではそうした現実が「孝」の実践を助けてもいたことを明らかにした。

清水則夫は飯岡義斎および服部栗斎と、中井竹山（当初予定の頼春水から変更）との関係を検証し、彼らの間には思想的交流と並行して、地縁や血縁にもとづく繋がりもあったことを指摘し、こうした繋がりの重層性のために、思想的対立が緩和された可能性を示唆した。

高橋恭寛は頼春水の江戸藩邸における読書記録と交遊関係とを JBDB を活用して調査し、儒者としての学問と、藩儒としての立場という二つの軸をもとに、春水が他の儒者たちとの関係を広げていった様相を描いた。

浅井雅は広島藩の藩校成立と儒者の役割とをまとめ、同藩では 17 世紀末から儒者の抜擢があり、寛保年間に学問所は衰退するも、天明元年に再興された経緯を詳述するとともに、藩校では学派間のバランスがしばしば問題になったこと、また藩学の朱子学への統一以後も、他学派は存在し続けたことに注意を促した。

ベティーナ・グラムリヒ＝オカは JBDB（https://app.jbdb.jp/#/）のサイトを改善し、データ入力を継続し、あわせて各所で当データベースを紹介し、人間関係を可視化する有効性をアピールした。

(2)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は頼春水研究を前進させたのみならず、18 世紀後半の思想史研究に対し、新たな研究視角を提示したものとして位置づけられようし、本研究のインパクトも、この点にかかわる。

まず頼春水研究について言えば、本研究により、春水やその周辺において、朱子学思想は藩儒としての公的活動のみならず私的生活にも密接に関わっており、公私両面にわたる人間関係にも、思想的交流が深く結びついていたさまが明らかになった。

新たな研究視角とは、まさにこの点を指している。上記のように、本研究は従来の思想史研究以上に史的側面を重視したと言える。思想それ自体もさることながら、儒者の現実生活にも相応

の重点を置いて分析を行ったからである。こうした思想と現実との関わりこそが当該期の儒者のありかたと考えられるし、またそのためにこそ、思想を主たる対象とする思想史研究では、対象把握に限界が生じる恐れがある。本研究の視角はこうした点を克服するうえで有益であろう。

(3)今後の展望

当該期の他の事例をも対象として、より詳細な分析を行う必要がある。また対象時期を前後に拡大し、比較によって各時期の特徴をより明確化することも求められる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 清水則夫	４．巻 259
２．論文標題 中井竹山の名分論について	５．発行年 2021年
３．雑誌名 【アジア遊学】書物のなかの近世国家　東アジア「一統志」の時代	６．最初と最後の頁 151-162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 本村昌文	４．巻 第3号
２．論文標題 父の看取りと死ー『春水日記』を手がかりとしてー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 老年人文研究	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋恭寛	４．巻 26
２．論文標題 頼春水による儒教テキスト講読に関する「JBDB」を用いた実態把握	５．発行年 2022年
３．雑誌名 経営・情報研究　多摩大学研究紀要	６．最初と最後の頁 115-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ	４．巻 報告集
２．論文標題 只野真葛（1763～1825）：近世の学者ネットワークとジェンダー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 2019年度国際研究フォーラム「21世紀における国学研究の新展開国際的・学際的な研究発信の可能性を探る」報告書	６．最初と最後の頁 57,70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 清水則夫	4．巻 未定
2．論文標題 中井竹山の名分論―他学派批判との関連を中心に	5．発行年 2021年
3．雑誌名 アジア遊学	6．最初と最後の頁 校正中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ	4．巻 14
2．論文標題 大学資料を使用する教育の可能性ーデジタル・ヒューマニティーズを活用して	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アルケイアー記録・情報・歴史―	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　4件／うち国際学会　13件）

1．発表者名 清水則夫
2．発表標題 Interactions among Confucian Scholars in the Late Eighteenth Century
3．学会等名 Confucian Scholars In The Late Tokugawa Period（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
2．発表標題 Visualizing the Networks of Rai Shunsui
3．学会等名 Confucian Scholars In The Late Tokugawa Period（国際学会）
4．発表年 2021年

１．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
２．発表標題 ppropriating and Expanding Court Traditions: Scholarship Practices of Late Tokugawa Japan
３．学会等名 EAJS 2021 (Online)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
２．発表標題 The Legacy and Times of Rai San’yo: The Nexus of History and Historiography in Robert Tuck’s Forthcoming ‘Nihon Gaishi’ Translation.
３．学会等名 ICAS 2021 (Online)（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 本村昌文
２．発表標題 An Exploratory Study of Life and Death in Shunsui Diary
３．学会等名 Confucian Scholars In The Late Tokugawa Period（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浅井雅
２．発表標題 The Role of Confucian Scholars in the Establishment of Hiroshima’s Domain Schools
３．学会等名 Confucian Scholars In The Late Tokugawa Period（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 浅井雅
２．発表標題 広島藩における藩校成立過程に関する一考察
３．学会等名 関西大学セロリの会
４．発表年 2021年

１．発表者名 高橋恭寛
２．発表標題 Reading Confucian Classics Together: Rai Shunsui and his Network
３．学会等名 Confucian Scholars In The Late Tokugawa Period（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Bettina Gramlich-Oka
２．発表標題 Women and Networks in Nineteenth Century Japan
３．学会等名 Japan Forum（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Bettina Gramlich-Oka
２．発表標題 Women and Networks in Nineteenth Century Japan
３．学会等名 European Research "Day & Night"（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
２．発表標題 手紙でつながるということ：只野真葛と頼静（梅シ）の場合
３．学会等名 日本近世文学会オンラインシンポジウム「つながる喜び――江戸のリモート・コミュニケーション」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 本村昌文
２．発表標題 〈迷惑〉意識とともに生きる―日本人の死生観を考える―
３．学会等名 岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科2020年度市民講演会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
２．発表標題 只野真葛（1763-1825）と学術ネットワークの欠如について
３．学会等名 21世紀における国学研究の新展開（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
２．発表標題 New Research Infrastructures
３．学会等名 The Digital Transformation: Implications for the Social Sciences and the Humanities（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
２．発表標題 Localization in the Context of Japan of a Large-Scale Relational Biographical Database on the Model of the China Biographical Database
３．学会等名 JADH 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 ベティーナ・グラムリヒ＝オカ
２．発表標題 Cultural Crossroads: Depictions of and by Women in the Nineteenth Century
３．学会等名 Japanese Travelers at the Golden Gate: How Japan’s First Foreign Mission Changed the Course of History（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 Bettina Gramlich-Oka, Anne Walthall, Miyazawa Fumiko, Sugano Noriko, eds	４．発行年 2020年
２．出版社 University of Michigan Press	５．総ページ数 289
３．書名 Women and Networks in Nineteenth Century Japan	

１．著者名 土田健次郎教授退職記念論集論集刊行委員会	４．発行年 2020年
２．出版社 汲古書院	５．総ページ数 420
３．書名 朱子学とその展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

JBDB　日本の人名データベース https://jbdb.jp/#/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	グラムリヒ・オカ　ベティーナ (Bettina GRAMLICH-OKA) (60573417)	上智大学・国際教養学部・教授 (32621)	
研究分担者	高橋　恭寛 (Takahashi Yasuhiro) (70708031)	多摩大学・経営情報学部・准教授 (32695)	
研究分担者	本村　昌文 (Motomura Masahumi) (80322973)	岡山大学・ヘルスシステム統合科学研究科・教授 (15301)	
研究分担者	浅井　雅 (Asai Miyabi) (80782010)	神戸大学・国際文化学研究科・協力研究員 (14501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Confucian Scholars In The Late Tokugawa Period	2021年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関